



仇報

金毘羅神靈記

二

^ 13
3324
2



13
3324
2

繪本金毘羅神靈記卷二目錄

一宮甲斐守たのまろ御み作し

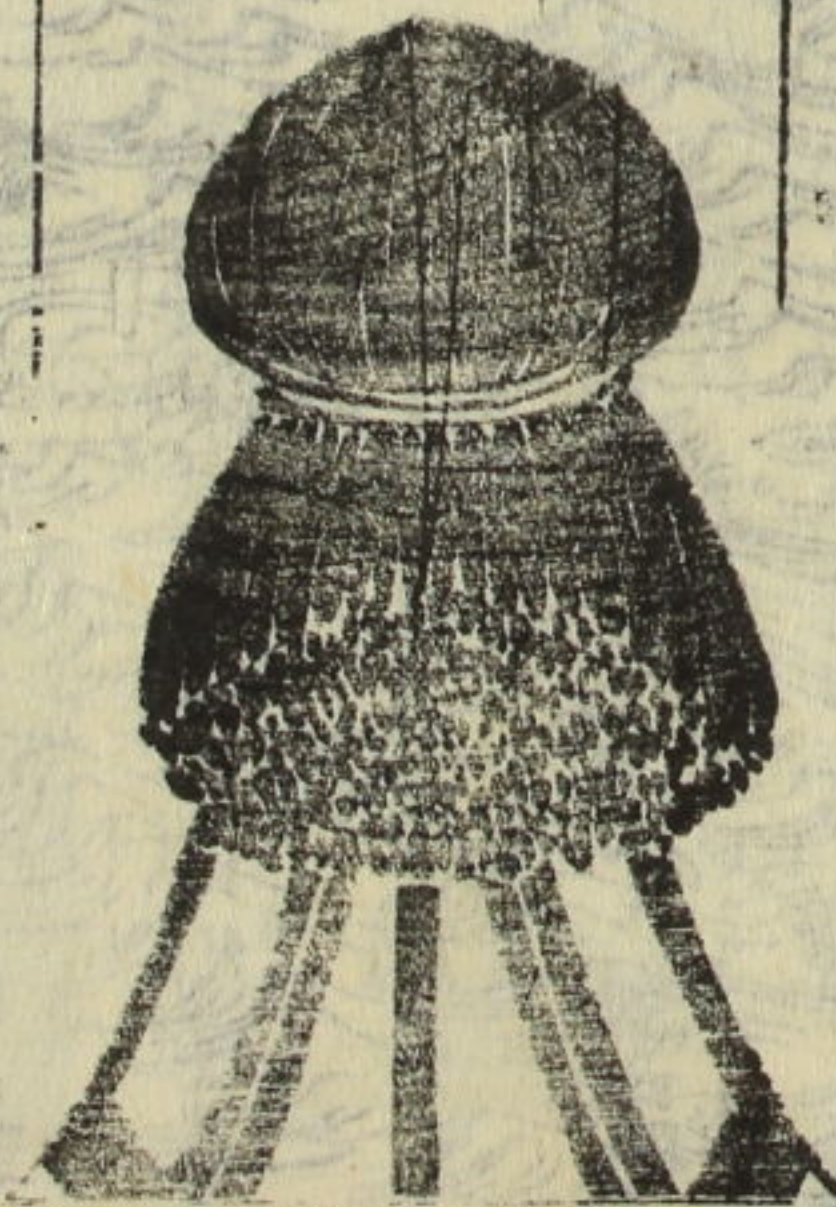
同僚士どうりょうしもも権けん二に官くわんとと批ひ評へいささるる圖ず

甲斐守かひのりもも権けんとと害がい人にんとと傳たつふふ活かつ

甲斐守かひのり赤あか士しのの標ひょう旗かた浪なみ遊あそぶぶ圖ず

同どう院いん門もん無む名なとと子こ及およ小こまま付け圖ず

一宮いっくわ氏うぢ之の家け并ならび画え餅もちととるる活かつ



五十年八月廿九
本大學出版部

甲斐守高橋小次郎の圖

甲斐守於彼中流死せる後

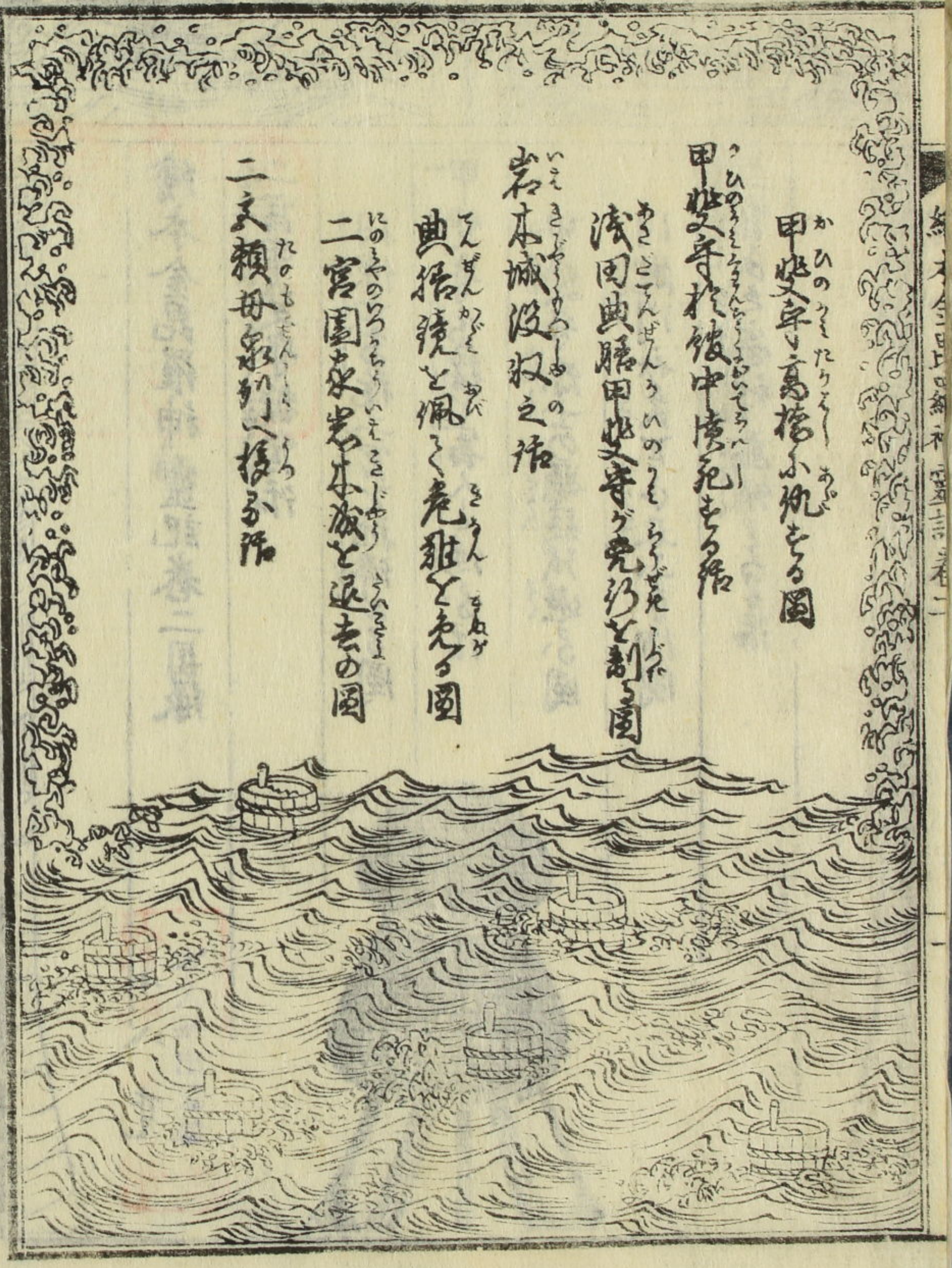
浅田典膳甲斐守を先づと割る圖

岩本城没収之治

典膳統と佩く虎紐と老る圖

二宮園水忠本城と返去の圖

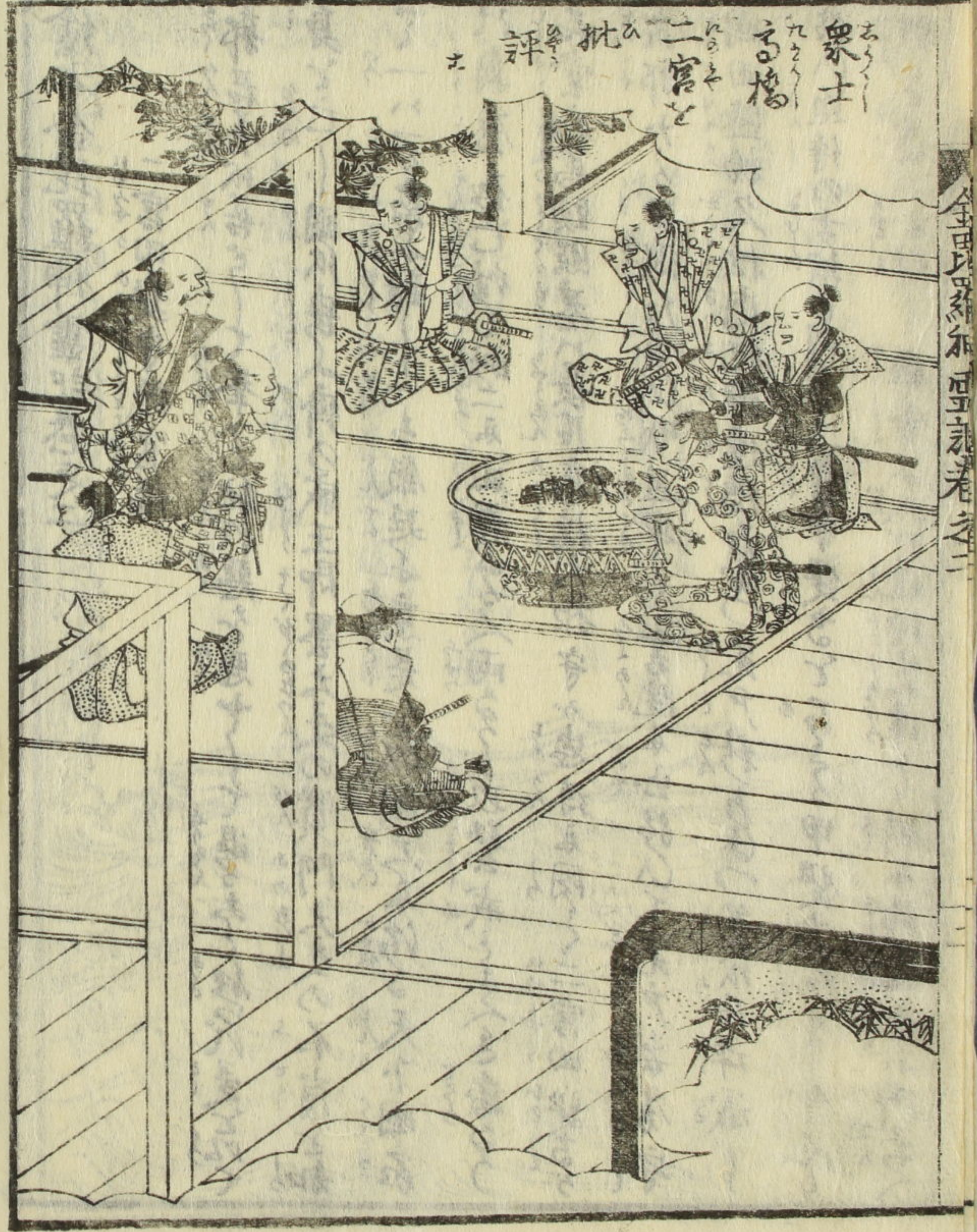
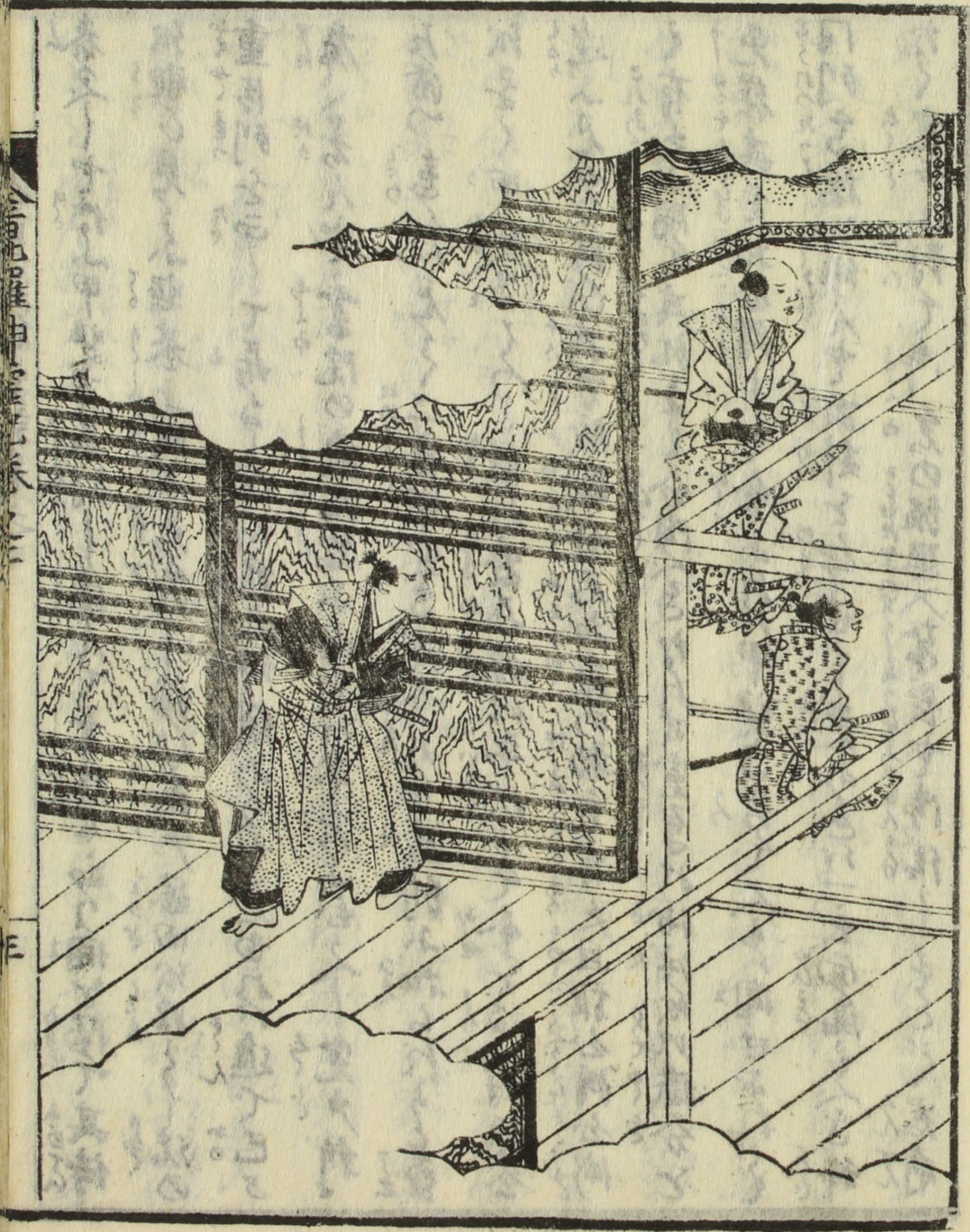
二文頼母おれへ接ふ治



繪本金毘羅神靈記卷之二

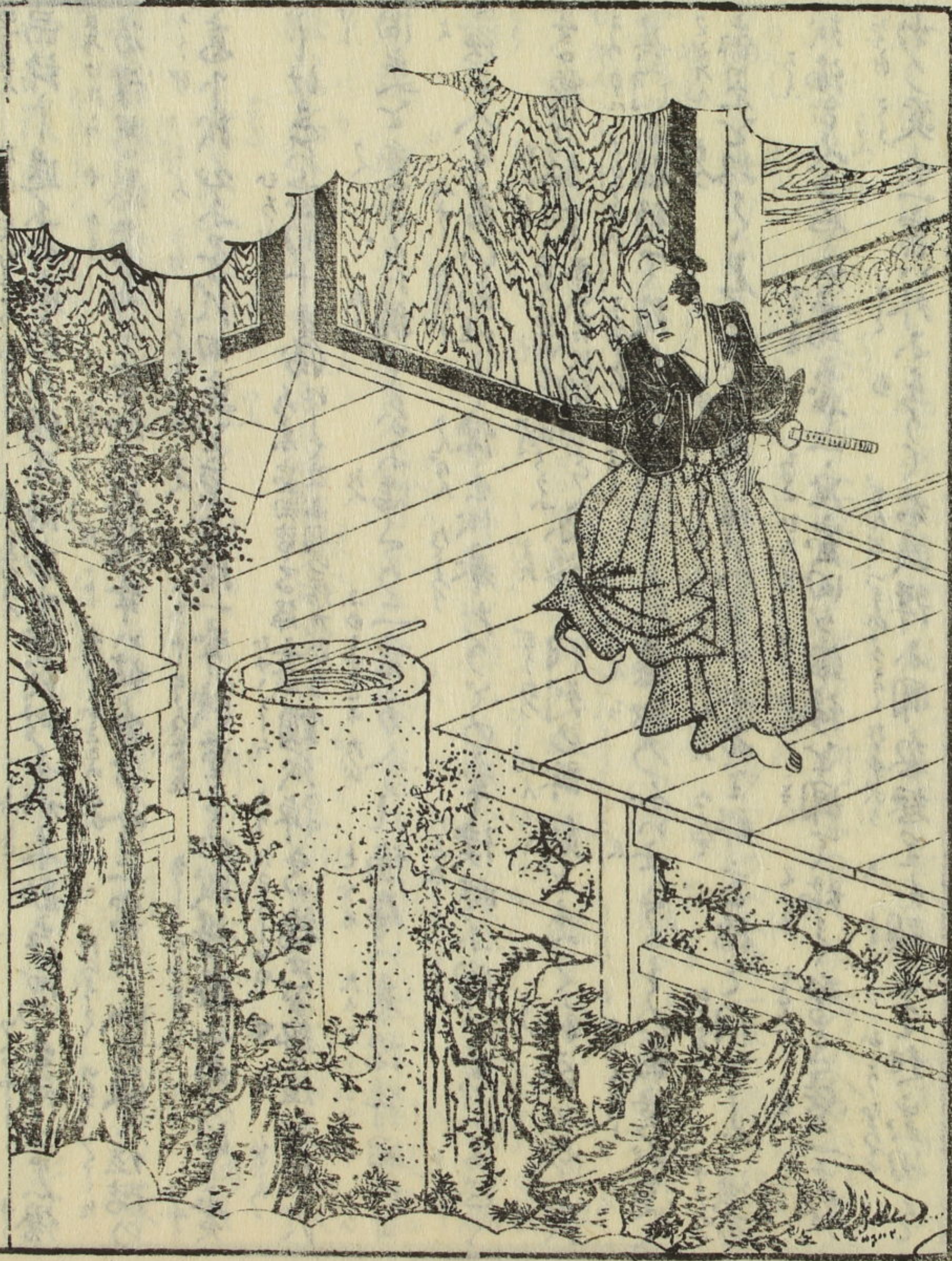
二宮甲斐守統官治

郭君善孤若くして奉て能に惡を惡せしめて退るおと能に能を以て
身と亡し一國孤喪し齊の威王即曇太史の賢阿太史の不肖と知
て一ハ万部小封し一と殿廷小童是と取國大治る天下國家
此真廢存亡維く此二由君する人兩あつて以經云戒とまへと處り
石堂右馬頭照基ハ長尾高橋大和守が忠諫本因て二宮田斐守
貴邪方々と裁た多ハ明且早く書院本出給ひて完戸安房守
岡田監物久松内紀修達傳左衛門完戸新左衛門為孤石評議
終ハ迎侍の士孤のて二宮甲斐守と召する甲斐守何事せん
駭と遠小お仕し一應事小入ハ迎侍先達と斯本侍儀也小津



泰之しや侍小甲斐者兼引し進んで書院小御り間を隔て其侍
 狐取に見るふ懸基上殿小若彦し終ひ完戸墨田狐路とく法の
 重居列を正して居るるび何れ大評儀ありせ見由は進で已
 席へ着ん中書院の殿居際小御進未彦ふまへし完戸新
 及清の事度んく二宮甲斐者君命あり其前小相られうと
 狐をく甲斐者くんと畏れ殿居際に平伏して命を侍は時懸基
 違ふんり終ひ其方儀職分不お意の勅方有之且難公侍公卿
 有之小周々其礼をり分附人さなれ其完戸は沙法成以職分と
 免罪其旨お公侍よや命あれば甲斐者君人少の聞口されども
 同列高橋を傾ん中其計と正せし是あまは一云面漏之と辨
 なく完戸小對て清名の執退入事畏中侍侍しとく君前

狐取見懸奉小降く重居の退と来ると侍は時中其執思も
 方今尚家小終く我奉と君前小迷奉狐礼さん若同列大和さ
 外あるはト大和さの暇日深念より帰金し更を計の違中し又
 今日の席もも在るは物も終る今日の清沙法正しと君の賢
 色より出る形へん時自まぐ肩と並ぶるその母つし身の今自
 一人の後小徒ん奉竹の恥は是も面んやや何れもして一度儀
 分も優は恥を雪さんあえうは退かの加高橋も終ふ空家樂が
 奉勤我伺ひ見其上の思通河ん中完戸岡田又松の傍士退のく
 懸奉小御家以侍身と謙くやうる今日の時沙法深く畏進入
 若後一對して色赤面小及び小後受儀あまは竹交しお仕は仕
 け養と承んお先刻より侍侍中連れ皆を毒小思ひ今日の



一 文甲斐吉
 凍士の
 燥疑を
 避ふ



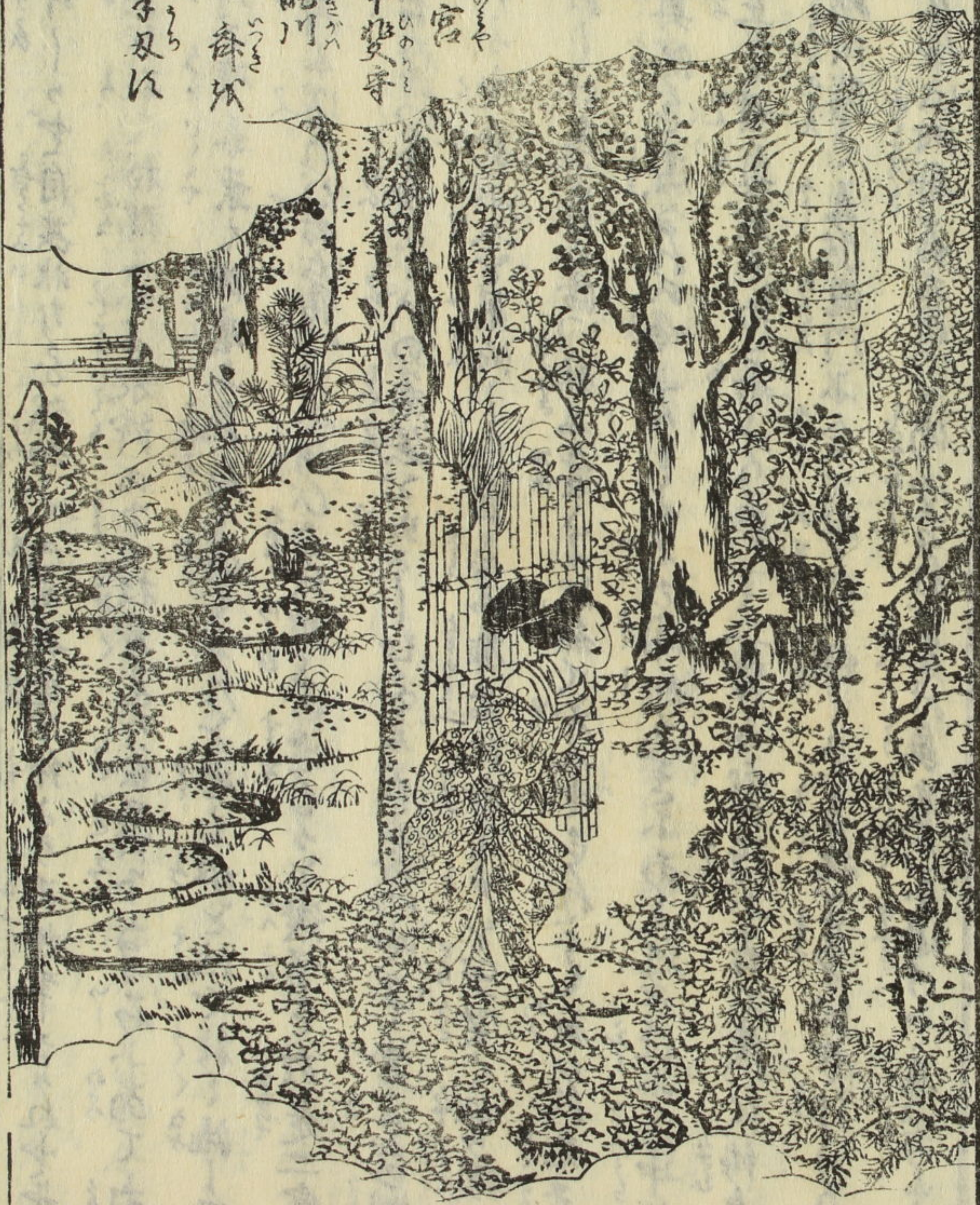
品評一送不好處に左組て優劣を定むれば本勲左衛門云西士中優
 劣僕等思案ありて知れば佳幸の姑も方今二宮召の後は位階の
 高下は公を以て回定と定むれば一幸法をその成得奉ふればと賞
 けは六宮田十萬石は本宮田倍々益々職頭瓜掉字橋已が勢位と被
 旧交と愛さるる彌まふ小橋より二宮方今此彌辱の高橋輝國の日
 夜不入る毎ひ出仕し練云瓜奉たりての幸僕等小聞と思ふ心
 なる橋が強刻は下の御事と申す小橋を同列の強刻と云く恥ふと云くは
 其門小藤初て後業瓜計んとん藤恥乃をい士するその最貴ぶを
 我見と以て見よ六二宮の婦人女子小方里那高橋と同日く優劣
 被強むるやや也罵れ一在室田が激強と聞て姑く驚と皆二宮瓜
 初り笑ふ二宮の外小方りて前後洋小聞忽怒を頭より起室田を
 指く実否瓜計一橋が強刻の怒と暗んせ小を入んとせしが老練の士
 方れば多分公付て怒と押へ面交を和めて何事なく其序小入る小日序
 の面も去げなく會釈一文も東西此後小及ぶ二宮一旦の怒は退か
 せ極密計と以て退んせ思ひ一橋が橋と退け已改と執く眼と散し今日非
 儀り一とみく面瓜掛んせ思ふと一箇の惡念瓜起し退去の如
 き橋が郎へ立寄昨日の休日おまは例の藤葉進上被へ一同暇を
 経ぬ何方やや也の面瓜掛んせ思ふ昨日の午後同暇おまは推系ま
 一と昔二宮重て云中は事でも例の通一客一亭なり後
 侯侯の積りく清かある一せ約と定く帰る斯く是日小あり葉
 會れ及名に命し又一統愛の小姓瀧川被と密に拍と汝竹あり

品評一送不好處に左組て優劣を定むれば本勲左衛門云西士中優
 劣僕等思案ありて知れば佳幸の姑も方今二宮召の後は位階の
 高下は公を以て回定と定むれば一幸法をその成得奉ふればと賞
 けは六宮田十萬石は本宮田倍々益々職頭瓜掉字橋已が勢位と被
 旧交と愛さるる彌まふ小橋より二宮方今此彌辱の高橋輝國の日
 夜不入る毎ひ出仕し練云瓜奉たりての幸僕等小聞と思ふ心
 なる橋が強刻は下の御事と申す小橋を同列の強刻と云く恥ふと云くは
 其門小藤初て後業瓜計んとん藤恥乃をい士するその最貴ぶを
 我見と以て見よ六二宮の婦人女子小方里那高橋と同日く優劣
 被強むるやや也罵れ一在室田が激強と聞て姑く驚と皆二宮瓜
 初り笑ふ二宮の外小方りて前後洋小聞忽怒を頭より起室田を
 指く実否瓜計一橋が強刻の怒と暗んせ小を入んとせしが老練の士
 方れば多分公付て怒と押へ面交を和めて何事なく其序小入る小日序
 の面も去げなく會釈一文も東西此後小及ぶ二宮一旦の怒は退か
 せ極密計と以て退んせ思ひ一橋が橋と退け已改と執く眼と散し今日非
 儀り一とみく面瓜掛んせ思ふと一箇の惡念瓜起し退去の如
 き橋が郎へ立寄昨日の休日おまは例の藤葉進上被へ一同暇を
 経ぬ何方やや也の面瓜掛んせ思ふ昨日の午後同暇おまは推系ま
 一と昔二宮重て云中は事でも例の通一客一亭なり後
 侯侯の積りく清かある一せ約と定く帰る斯く是日小あり葉
 會れ及名に命し又一統愛の小姓瀧川被と密に拍と汝竹あり

今令汝背向したやや向希長三令汝君奉承いほつるれ智少くも坊て
 私依の格別の汚哀憐と為りしは何事小と何是令の背惟中と申
 乃小二宮莞尔と笑ひ頼したまふりしは付る一幸あり必小信る
 中一室の砒石毒薬取物して細末せし免濃薬に和く今日用言
 葉入入させし希少小思ふ所此薬他小用ひのへ履た小あは正
 今言橋度汝害せんを計するふるべしやゆらる汚宿意有るわ
 南付園家柱石の居と聞ある言橋度を竊小害し終らん幸君への不
 忠事一ふも六天罪逆是のら身と亡し終らん幸必然り令の背ト
 也言なりし一ふも六遠ふも主君汚言の大幸少易難し止むんは
 あふりて中陳汝伺ひて次お用人戸次吾を誘つて竊小刑せ告吾を
 小小警めた舟が公付と深く賞し何事も葉言ふ計ふたは只下の何氣

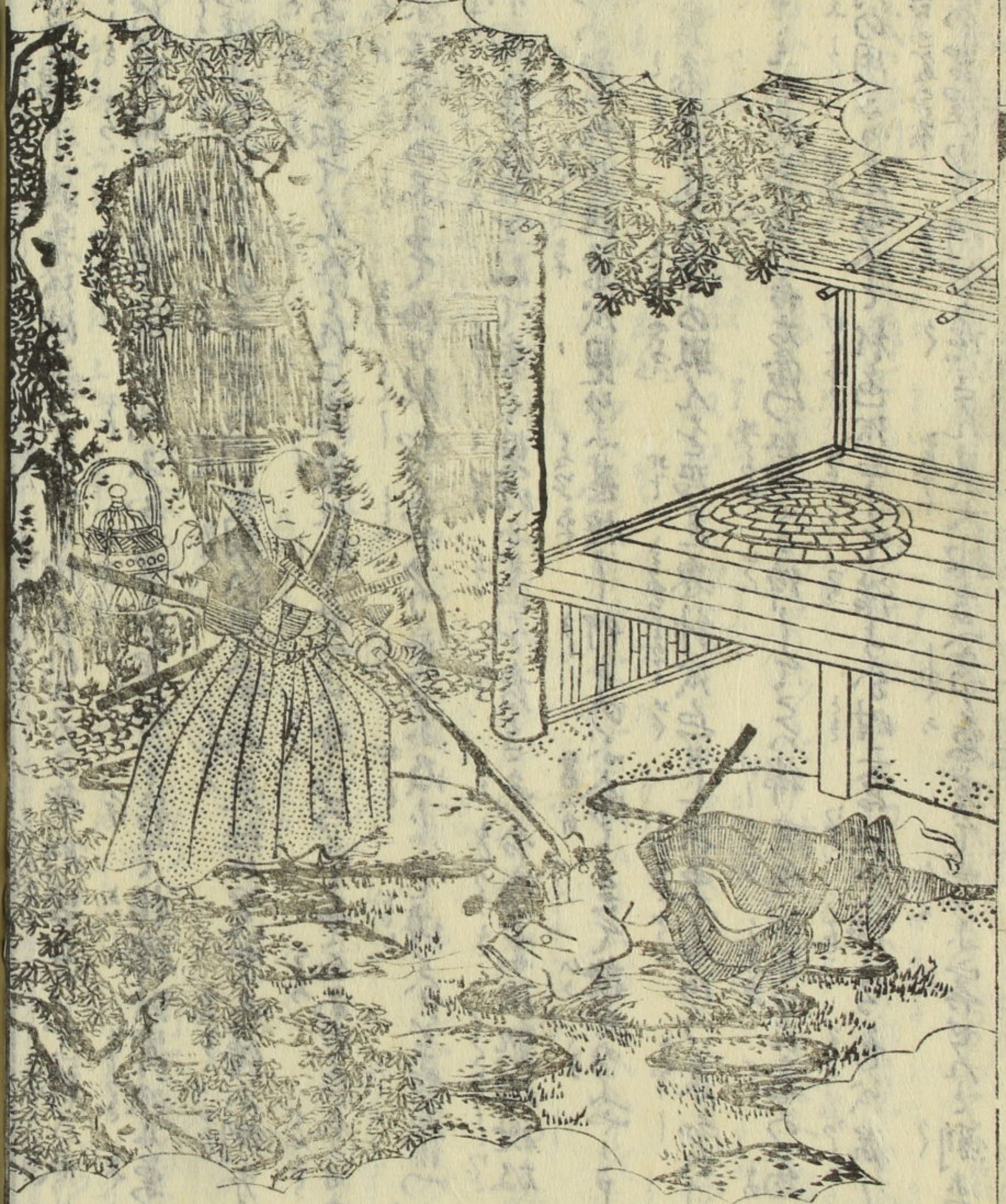
かく遇し其津沢池いと多君も惚られざるこそ肝要なりや汝戒免
 良財瓜梅して後二宮が側小一室の事勢と告て指揮汝軍次小葉
 の後小乃び今日の葉言何を用ひのや中お見仕はえと云儘小側方所
 葉言と取て見んとん二宮葉に知させし幸むりしや公あやり今日中
 茶室に此の品もて汝が法知るまふり見ふ小及トせ傳ふと吾を傳へ
 不聞めて袋と服と腰と見次小蓋を覆さ色合吾葉汝執徳徳様也
 小小警めた舟此葉瓜見り小甚怪し何もの小令もよきと扱せのやとやに
 二宮意角して幸の取んを恐是忽計取止し其葉毒何り葉知れり
 幸もかけ小云は吾を傳つ事知る傳してこそ稀有候と承り小毒ある物と
 竹の用ぬり充めんと私色瓜取して信上公付二宮放也愧るるも瓜病
 汝の智理あり何と云隠さん某大和也へ留意有るは小害せんと別也

二宮
甲斐守
流川
斎次
手及



金田羅漢園遊覧之二

九



金田羅漢園遊覧之二

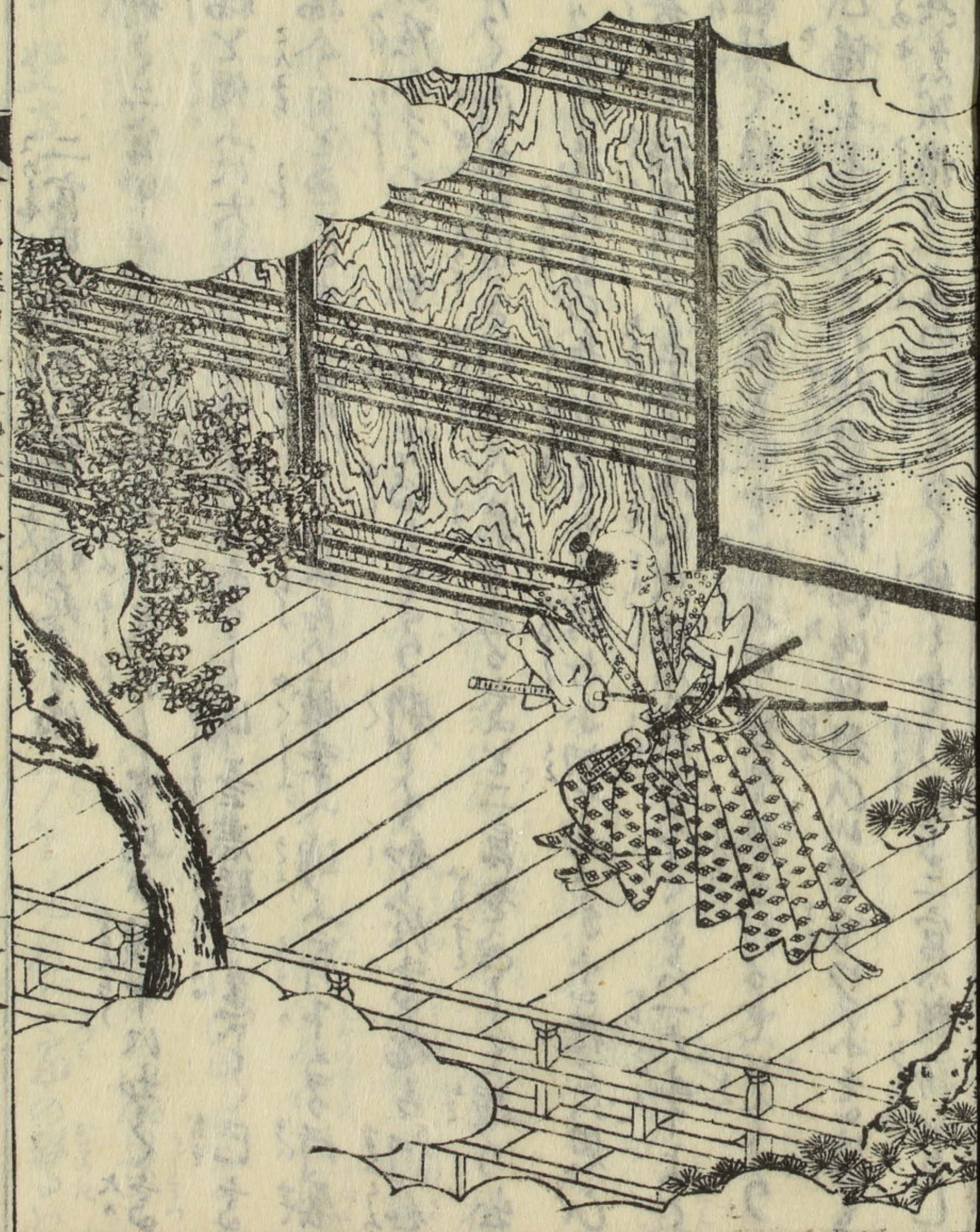
八

斗いっや自其非たか知く已小其念と繕うり必性事なれや
其取て極端小水津の下へ投付ふ兼窓に下る所小尚て救
所小毒葉も微塵小花散て流るる水と流で流く流して
度小運れ若右傷つ大小怪び改改の速るると僕嘆を於是二宮
若右傷つ小命ト代の兼窓と出う一ひか小若右傷つやぐて常窓の側
かる府庫小入と見ぬ一二宮急召兼窓に即て戸と閉く管類と
取一け色若右傷つ取小意う取知ておんやせれども能く元春
奥深と深るれ心うりも人の聞知るべき小あはれは小序中の
在く嘆息取れ居り斯て二宮公の行小若右傷つ取れ
坊取降く若右傷つ小命と破石と調一先右橋が若右傷つ取れ
乃右は時若右傷つ小命空たれ小家此真度已小通りや憂若千

懐けいへい母小若て右も左も計無一し世窓至る竊小若
あ小妻女且驚取と待止んと思くと若右傷つ已小孫ん
て其意取逐れ况婦人の洞用ひの小命れ小あはれは及て幸取
傷る小足履一亦後万金の計と右金先竊小今日の物と取小
志りしは若右傷つ小命空たれ小家此真度已小通りや憂若千
二宮氏之密計更修とある活
聊て院門の妻女の命取領て高橋が邸小馳至る喝若小信てお獨
取信る橋が常窓に入て候くとくま五人甲斐若右傷つ今日兼葉
進上は若右傷つと清葉約やせ一交は表うり時氣小感一殊亦勝ま
不中保葉致てく大切の事ゆも乃小命れ由醫國降た小命今日
山約若右傷つ小命換小再三止り小命れ由醫國降た小命今日

新久高橋が打殺しを辨焼が救せんがや、新久高橋の好
 妻小侍と命を命に織田の出仕の用と云ふをば、妻女と云ふは先
 蔵門甚怪し、此の急事ありて、お仕立、お仕立と云ふは二文
 那瓜怒し、此の急事ありて、お仕立、お仕立と云ふは二文
 と、俄人面談と、既小刀の柄、お仕立と云ふは二文
 主悪の御怒り、此の急事ありて、お仕立、お仕立と云ふは二文
 の幸に作られ、お仕立と云ふは二文
 は瓜、お仕立と云ふは二文
 出立と云ふは二文
 此の急事ありて、お仕立、お仕立と云ふは二文
 滝川と云ふは二文
 尋常介、お仕立と云ふは二文
 馳走人と云ふは二文
 若右衛門と云ふは二文
 同家、お仕立と云ふは二文
 事件と云ふは二文
 急角の狸、お仕立と云ふは二文
 夕お仕立と云ふは二文
 典膳、お仕立と云ふは二文
 家小入、お仕立と云ふは二文
 腹中、お仕立と云ふは二文
 たりと云ふは二文

金田屋敷



二宮
甲斐守
高橋
大和守
九人

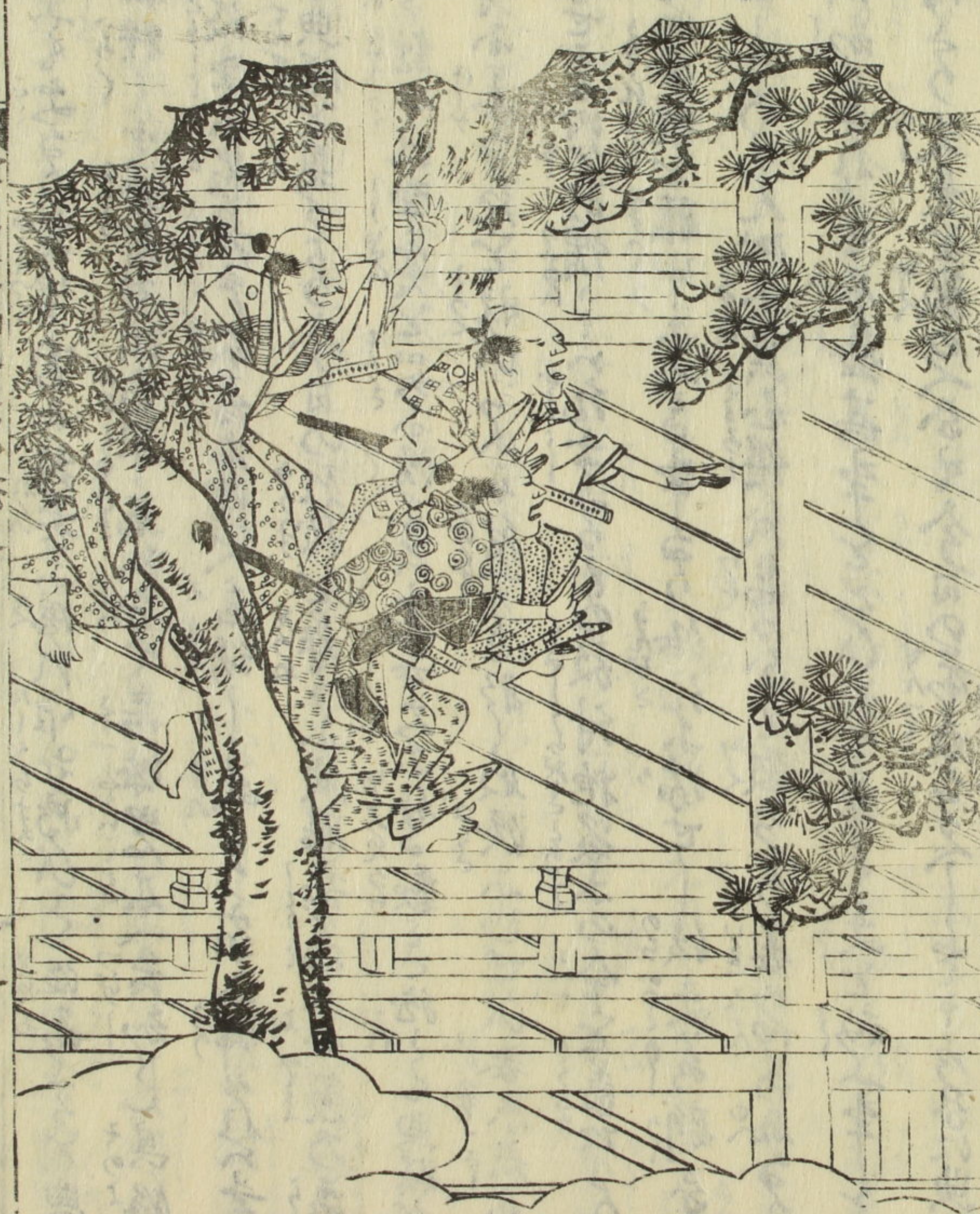


十一

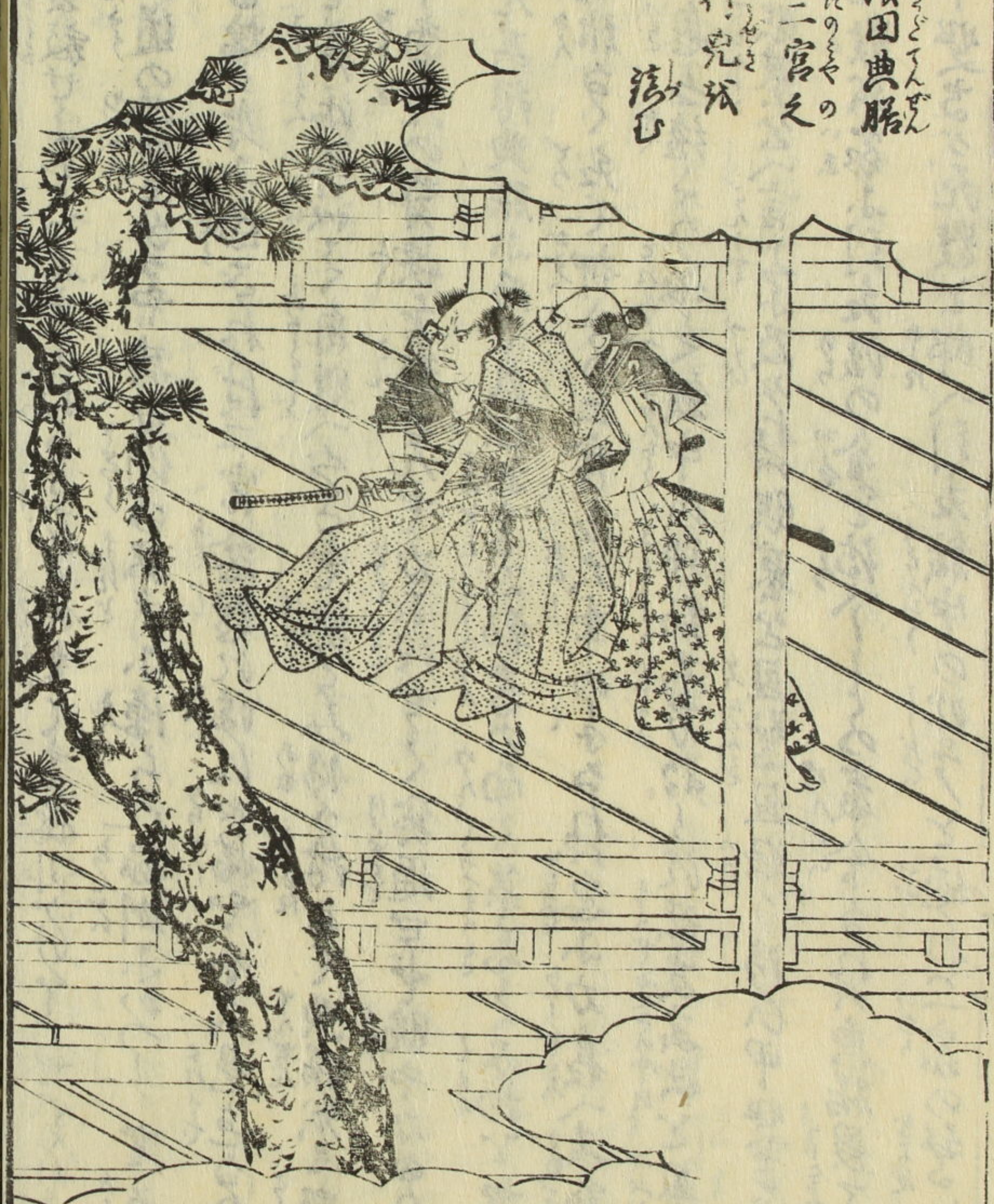
二宮甲斐守於彼中讀死をる傳

斯く二宮甲斐守ハ一途小窓計衆旅一也思ひ彼中に物く言
 橋と烟ふに大和宮と河原見ありと聞き悲腸涙意よく已る
 橋今日と色に也書院より長石の鐘車へ通ふ廊下より竹屋
 の陰小待て今やある中待つけり斯くも知れば言橋を何ぞ
 行く河原見返さる屏乃茶と色る交と二宮を色しそ踏り出
 いくふ言橋渡云の責教是よ也抜打小切かか子言橋を思ひ
 寄に也振返りく立向小浅田典膳は侍と見くま六一大事よと
 駈付て後より二宮と腹を抱る甲斐守礼を付る也是くより
 け場と某へ住され松俊の侍は流石形ひい也守り小言橋も
 其意は情り一言の意もきく餘くせはるる二宮の頼勤とよし

爰教せよむりふ中く持る刀と橋奉て言橋目がけて扱はれんと
 天道の叱咤あるや其刀例の扱戸小傳られ振例小あり一也
 言橋が身小當されば二宮愈怒に橋はけ場や今い色直り
 空着流孤扱く自腹へごとを突こみ傳る傳めて典膳孤も殺
 一當座の勢候を教せん中力小任せく実通口を腕やたぬり
 せん其傳典膳小及むれば相事小勅書の面く集事もくお物を操
 取難く名て押より二宮と大事の事なれば忽小力衰へ其座
 小息と絶より強之被中の發動大方終り流徳友其状と具
 に照基公へ言よ小及むれば照基公且怒り流ひ甲斐守も
 死骸孤家小引死後の命と傳へしとの教命され典膳畏て
 甲斐守が死骸と邸へ引死被中の死をと述べ一家の勢ひ



あまごころんぞ
法田典膳
二宮之
行丸城
法心



いよもふさり松中書女愁苦不堪ん唯打掃ひく泣きつゝ典
膳行く力と付ひ有早馬込打て居休老本へ告別し其母
の没事の家老戸次君を傷つへる語しまゝ家小傳たる事
女典膳と見ると今日の取次と尋ふ典膳岳翁の不意乃為
令館中此事實と具小傳をい妻女大不意の歎と流る典膳が
身小恙をたどればいふ付一と好くぬ涙ふじせひ妻未君本
嫁せざる父の謂い一丸さるりの取付抱返すの命と蓋たん
ぬ必死と腹中まどと事なり海地小塚せし後まゝ新子
妻もあらん時必其を得瓜意ふかと教のり善妙のあり
瓜切らざるも不意其事とさひかて果くまを秘す事を
得たり父を教のりも今日の事表るるべき中り家に典

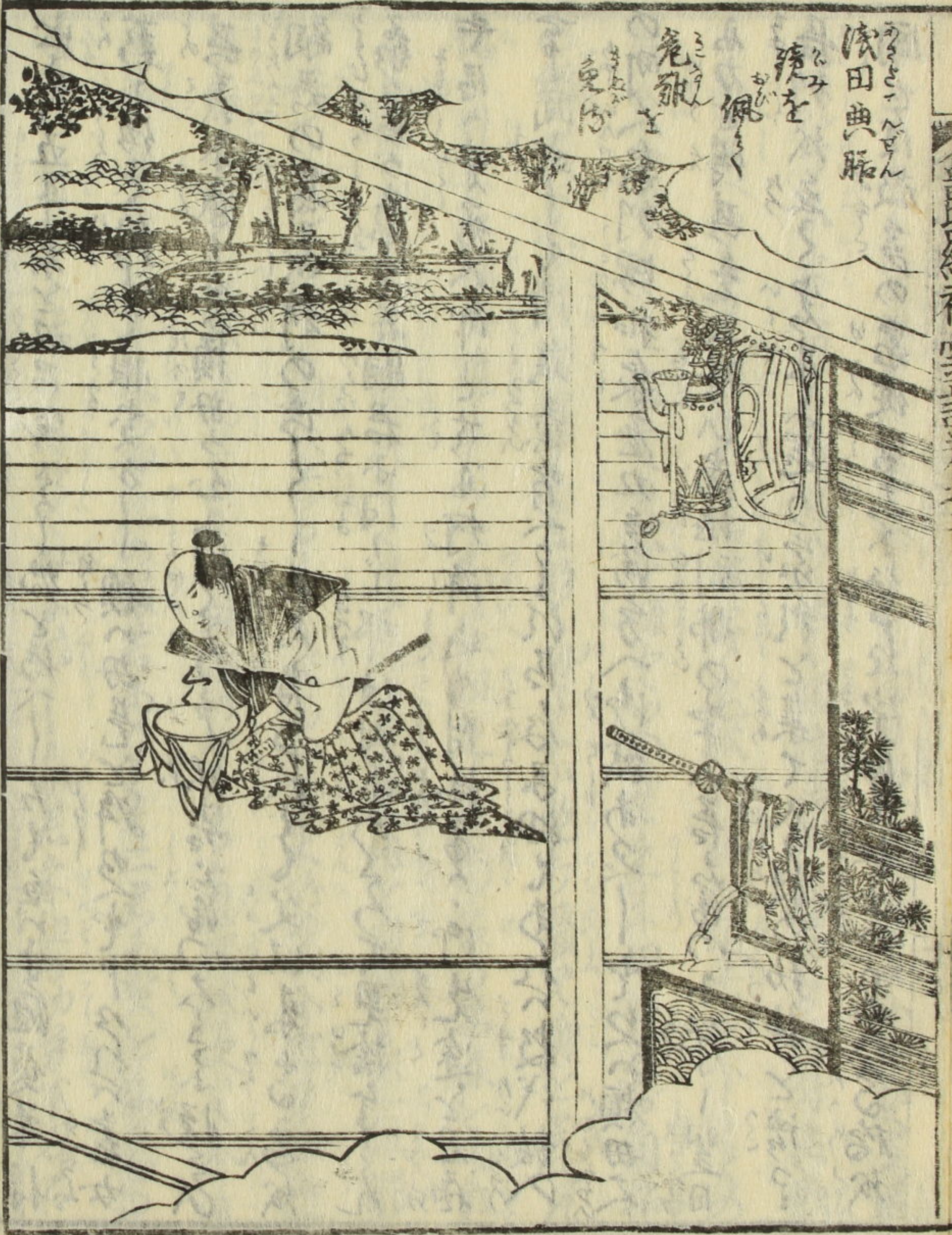
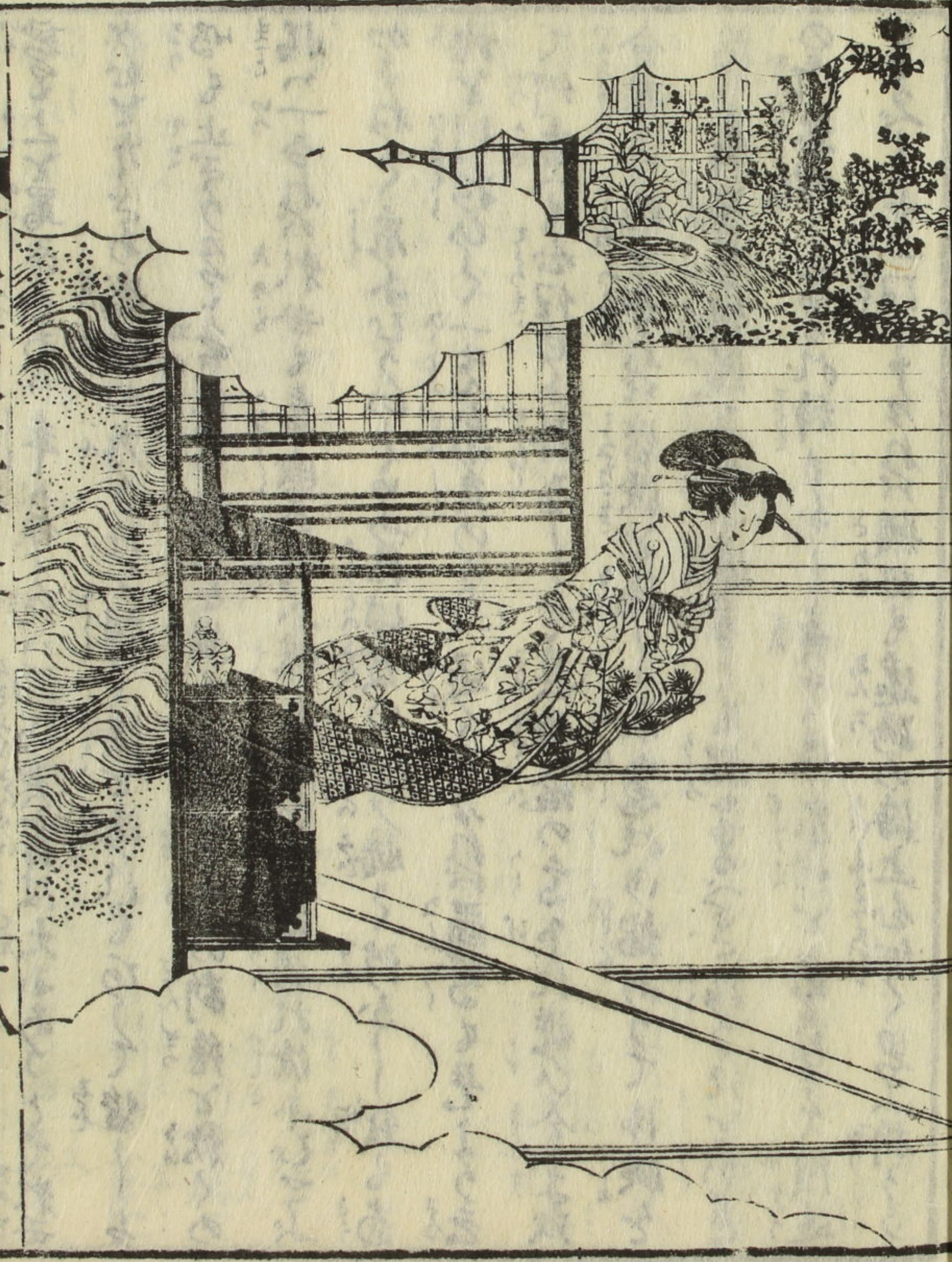
膳もくめてむ付松中の境とくふ刀麻深く張る典膳大不
意と家今日岳翁の病小害瓜意ふんと知くお小救せ
そ病と知どりせ慨然として哀感と嗚呼今日は境なるを
典膳も共事命瓜意ふると不計も死を先れし事二宮遠
縁の致と受たり二宮は是が病も互て妨らまうと平日武乃
にかと用たるも病者の乃不意あはれと同人感歎とくそ

岩本城没収の作

爰小二文甲斐書が病子頼母の未と初を秘しく居城防別岩本
に在り父甲斐書不意の事何つてた去せしとの報と聞ぬ
相も取あへば頼母三人と従一屋疾汗馬小散うりて長列の
身小恙も母子対面し送小遠般の不幸瓜意と後命の剛王

能く小庵合と安げん危角して旬日存と過りて小甲斐支這
叙のひ中不來に思ふ清怒り法く領地居城改易を伴付嘉敷
ら妻子へ下さる間早く岳峰等宅成引掛ひ退去さるゝとの
君令下りし一重更ふ款と塔をいふも元來甲斐守が自拓
の獨り人となるに中も形く母子家老打殺て身と當へん
地と針を以頼母進めていふ家祖先より南家の急縁と頂戴
一就中祖父以來一味此まとして件多の末地と塔場をいふ一因罪
と得て宗と覆り一國に去るゝも君臣の義文地の同小進るおは
因家未一日の仕成もおされども頼母の中より急決成て今日
小あ身おられぬ末あ伊松の報若ありとも二君不従と變るを
唯身と村世不保り自故て母不保り一嘉祖宗祖の功方公思は

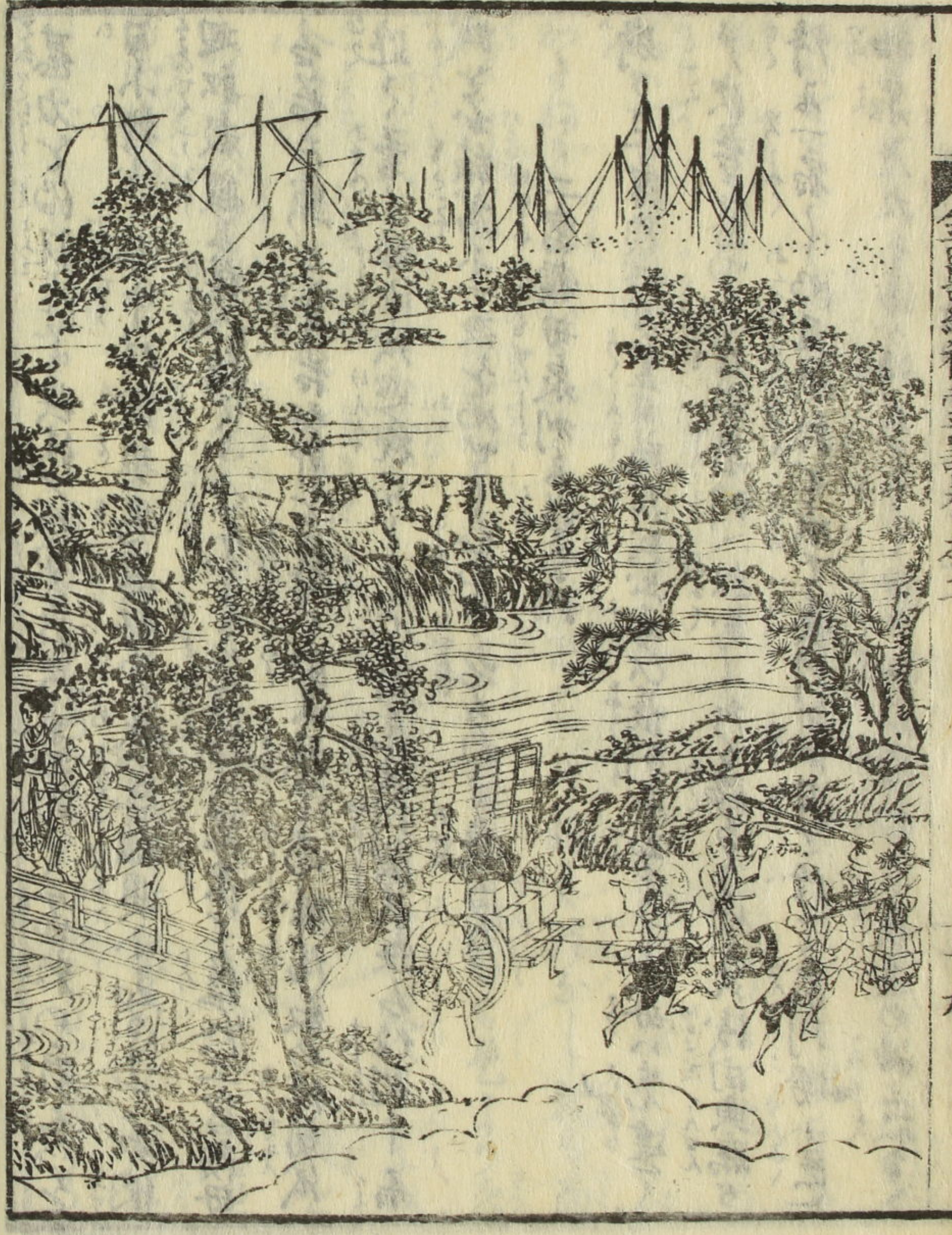
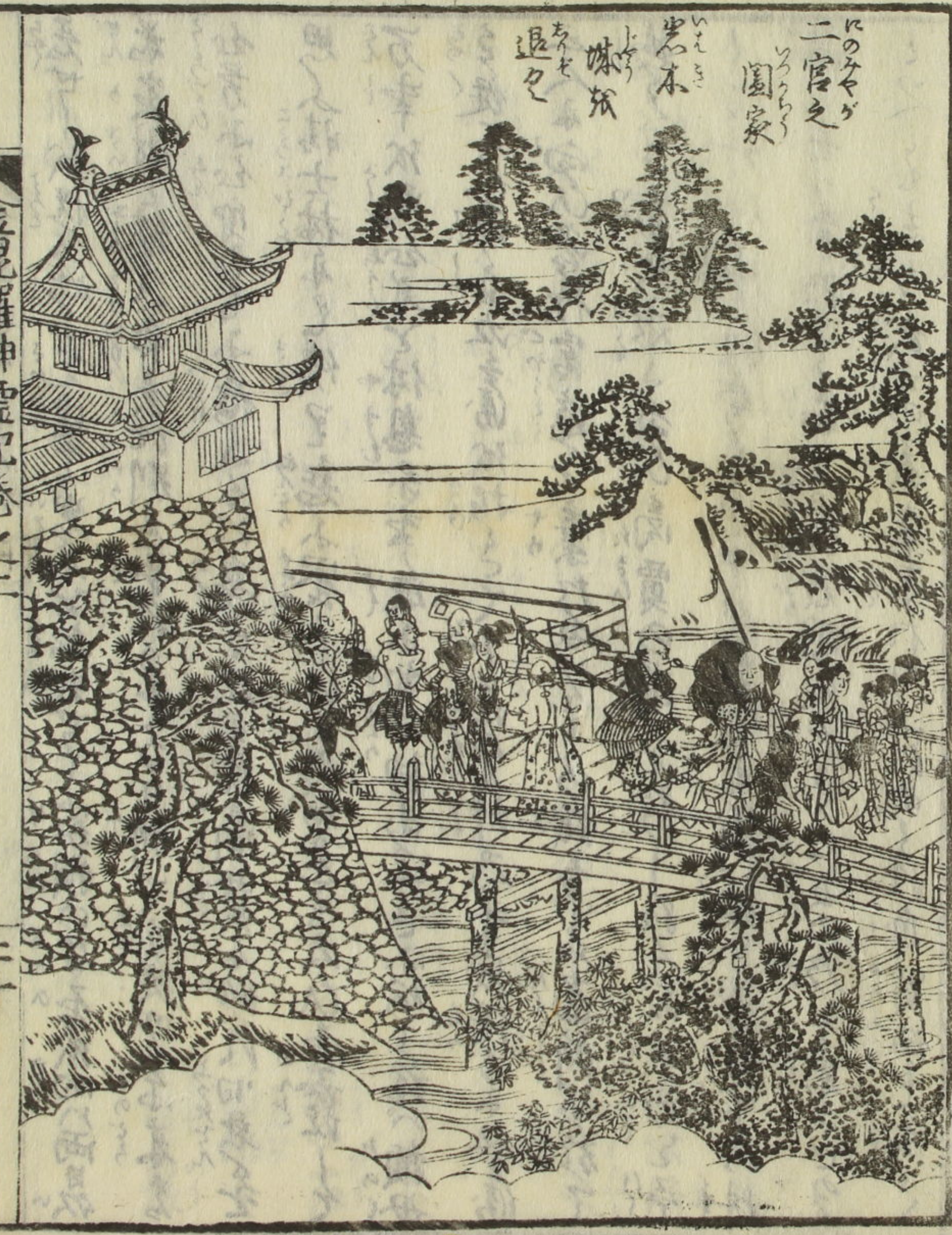
出され五斗米を以召喚さるゝ物と得べし左も無バ生後員年採
藪小佐と終り恨交方一頼母母是と許ぬをりるる妻女
其義小感して頼母を公不保り戸次若左衛門をさるゝ恨さび
嗣君の真義斯のぶく一居不肖されとも父以來之の悪公
義の居が意も亦嗣君小日一那は時小あゝて見捨さるゝん
や居の身若又郎とたれ何許迄も付添まへ伊先途と云居
言問おし一も清焦意有るゝに居存子細もあねお代被入
の町人衆別塚和泉屋九多湯方へ清紙あえし一せりの頼母之
小力と得其意にほい尚地引拂の幸い若左衛門小托り一翌日
長列張立く岩本小還り家祖と集て今叙の勅許と清り
聞せだ較多の宗從皆大不従り中にも壯士ありのり高橋成



淡田典脈
 鏡を佩く
 免服
 免服

驚き上と罵るもあり幸が命したハ獨福災害は天不ありとて乳母
が心とわごめ盛衰のたふれと恨て涙と涙にもあつて誓しと
鳴も止ざりるる各位思ふ所と異さども三宮の断絶と歎くの
情ハ一さわれ乳母も哀感の情不堪んおのむを救めれば泣小むせよ
かきねく息小むいひくくわねばの年悔く泣かす我も尚
地と引おひく一先泉原の方へ退くをわら雨等も是より去
て何方も公何せふ都をしを其侍給の言下に従ひ金子次
分共く胸ときれは皆涙と流し不と思れ少猶ありて涉眼を
終らまはる馬馬飢渴且之小遠るるも眼をさぶさばるれと新進
の所惠瀬しあるれ群りかし考す涉家什と泉原まで護送
まぶしを一日小やわら頼母も遠路の海上公細く思ひ折るる

慧力とゆねんで其法に依りて其母の心もわく家持の心を
日小継ぐ味中れ武具馬具以下衣篋雜具小なるまで取納
廻船救護小狭入船く小分家く先達く岩本と登江二宮頼母
と若右衛門が弟若右衛門と従く跡小残るる尚味法取の法司成
途く善く味中れ巡視せし先て首尾能く引渡其後と任割し居
城とを頼母小一夜をぬせし公の中あられく哀なり
二宮頼母泉列も娘も活
斯く二宮頼母と翌日旅店に出再び長列小をりし母ハ先達て
戸以若右衛門のし在小泉列へ船かしたる路よりけは法因典膳が
行小一宿し四日使船と来て長列と公日と経く泉列場小は
和泉屋九多湯が洋小見く母戸は小対面し長途の海上歌る



若し一紙帳の決小先達て忠本と出せし家頼の安否成四の両目
 和家財と護送各素に別と去れり中より新て自從四人亦本を
 公芳小公卿とも不癒くつに専ら九を傷高買本紙は旧君を
 思ふ情士林も優里慈小容しけさ何はも大ひ不安味して
 万幸成園公身と休息事事既不旬日相あるさ小何は種々頼母
 自從三人専ら九を傷成振として卜居生計乃幸成後さ九を傷
 三人中向ひ各振官遠を棄たぬんとの儀さるる當所小於て
 執るる家成求る向ひ高買の道を好し然んぬ某力をそ
 して計ひあはれんぞ中々おの君を傷の頭と掉足下の料
 簡も去る幸能がら家主君一被國成去る仕友の乃と棄てせり
 と之とも志ち武士の義を忘れぬにありは身買成を成く

分厘の利と幸ひ送居安樂成計事幸其宜ふありは兼兄身成
 添なる力及芳若と取て知實成助なるんが成るる來さるる
 ろむりしる青雲の志ありと耐不遇さる士皆又と農圃小寓
 して自耕成分とれ種さるる意成種種一幾箇の田圃成得
 て兼兄身自ら耕し衣食小充時成成成得べし是士林の交
 是断と之とも及て勇士の情も叶ふ成と成と成と成と成と成と
 久ぬを傷戸成が何を大に小感し其意氣の成に己が成るる
 情と成後家頼母も戸成が偏小依し九を傷小計て不用の家
 財成棄て教百金と得同五和泉那の内もて教河の田地を
 求先自從とも小成地ふらけり云小成あま戸成兄身自ら農
 業成成免母子成夜成成給して年月成送るる成

